

笛と太鼓

室生犀星

青空文庫

子供ができてから半年ほど経つと、国の母から小包がとどき、ひらいてみると、小さい太鼓と笛とが入つてあつた。太鼓には六十銭といふ赤縁の正札が貼られたままあつた。巴の紋のついた皮張りで、叩いてみると、まだ新しいだけよく鳴るのである。無器用な作りを見せた笛にも、やはり田舎らしい、暗^{くろ}ずんだよい音いろがあつた。

片町といふ目ぬきの田舎の市街に、中島といふおもちゃやがあつた。風船、ゴム玉、汽車や刀や、さまざまな珍奇な^{おもちゃ}弄品^{りき}が、ところ狭いまでならべられ、サアベルや鉄砲の^ぶ鉄力の光つた色が、ちかちかしてゐた。その店さきに立ち、あれでもない、これでもない、と、^よ押し急いでゐる老いた母の姿が、じくじくした時雨つづきの、どうかすると霰でも来さうなうそ寒い日和と一しよに、やさしく、目にうかんでくるのである。

太鼓は毎日よく鳴るのである。とんとんとことんといふふうに、それを部屋にゐて机にかじりつき、あたまが濁り怵^{おそ}へかねてゐるときにも、知らず識らず私はほほ笑むやうな氣になり、やかましくても叱るわけには行かのである。遠いやうにも聞え、また近近と頭にひびきもする。しまひにはペンを投げ出し、いらいらした顔と目をこすり、こすることによつて一度に草臥れた私は、子供のそばへ行き、かんかん太鼓を叩くのだつた。あた

まは益益いたむが、坐り込んでさうしてゐると何だか優しくなれるからだつた。正札だけは人がみてもをかしいから除^とつてしまひませうと、女が六十銭とかいた四角な正札に指さきをつけるのだ。さうして置いておけ、いや剥いだ方が、いいかな、いややはりその儘にしておくんだと自分でもわかり兼ねるやうに、この小さな太鼓をみつめるのだつた。

朝は朝晴れのなかに太鼓の音がひびくのである。勉強部屋へはいらぬ前に、こんな音をきくのは、頭の調子をわるくするとは知りながら、疲れた頭になつて泣くな泣くなと太鼓を叩くのである。それゆゑ、つい書きもののとつつきが逸^それ、ぼんやりと庭をながめてゐるやうな日になることが多かつた。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆25 音」作品社

1984（昭和59）年11月25日第1刷発行

1999（平成11）年4月30日第17刷発行

底本の親本：「室生犀星全集 第二巻」新潮社

1965（昭和40）年4月

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

笛と太鼓

室生犀星

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>